

キリストの空中再臨と教会携挙の必然性

ベレーシート

●昨年 8 月の全国牧師会の「霊性の回復セミナー」において、「イスラエル」と「教会」に対する神の「奥義」—神のご計画の全体を、余すところなく知るために—を取り上げました。御国を受け継ぐ構成メンバーは「イスラエル」と「教会」のみです。神は異邦人にも福音を伝えるために、あえてイスラエル(ユダヤ人)を盲目にし、頑なにさせたというのが、ローマ書 9~11 章のパウロの見解でした。「イスラエル人の一部が頑なになったのは異邦人の満ちる時が来るまで」(新改訳 2017)とあります(他の訳では、口語訳「異邦人が全部救われるに至る時まで」、新共同訳「異邦人全体が救いに達するまで」、新改訳改訂第 3 版「異邦人の完成のなる時まで」となっています)。

●ペンテコステにおいて教会が誕生しましたが、パウロによれば、「教会は神の奥義」であって、神のご計画において秘められたことでした。教会がユダヤ人と異邦人とからなる共同体であることは、聖書を見れば一目瞭然です。初代教会はまさにそうだったのです。ところが、4 世紀にローマのコンスタンティヌス帝によってキリスト教がローマの国教となってからは、教会は完全に異邦人のものとなってしまい、ユダヤ人は排斥され、締め出されてしまいました。しかし 1948 年にイスラエルが復興してから、メシアニック・ジュー (イエシュアをメシアと信じるユダヤ人)たちが徐々に現われるようになり、異邦人クリスチャンに良い意味で大きな影響を与えるようになってきました。初代教会の最初の人々はすべてメシアニック・ジューだったのですが、キリスト教の歴史において逆転現象が起こってしまい、反ユダヤ主義によって、多くのクリスチャンがユダヤ人を迫害してきたのです。しかし神は、終わりの日に備えて、メシアニック・ジューの人々を起こしています。初代教会をモデルとした真の教会が再び整え始められて来ているのです。イエシュアが言われた「わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子ども、畑を捨てた者はみな、その百倍を受け、また永遠のいのちを受け継ぎます」(マタイ 19:29)という約束は、メシアニック・ジューに当てはまります。事実、彼らはそのような犠牲を払ってまでも、イエシュアをメシアとして信じるからです。ですから、教会が携挙されるのはいつであってもおかしくはないのです。しかしイスラエルの民に対する神の取り扱いとは別です。今回は、神のご計画の中で、教会が携挙されなければならない必然性について取り上げます。

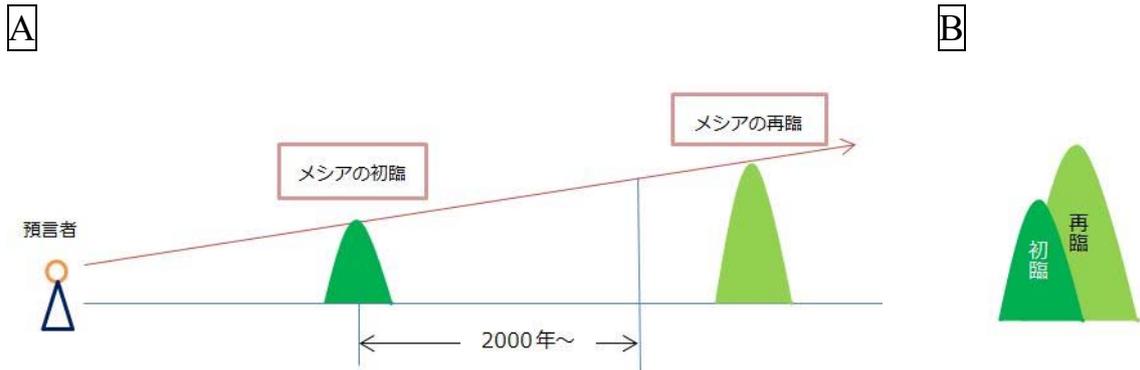
●神の教会改革運動の教理によれば、「世の終わり」における出来事として、「神の国」「キリストの再臨」「死人の復活」「最後の審判」「新天新地」などが挙げられています。それらはすべてキリストの再臨によって実現されることとして一括りにされています。このことによって、「世の終わり」における多くの出来事のつながりやその必然性を把握することが難しく、きわめて漠然としています。さらに、「携挙」も「患難時代」も「千年王国」も信じてはおりません。そのため、イエシュアが語るたとえ話のメッセージも勝手に解釈されてしまっている感があります(例えば、マタイ 25 章の「羊とやぎのたとえ」がそうです。羊とやぎのさばきの基準は何でしょう)。イエシュアの語られたのは「御国の福音」です。それはイエシュアがメシアとして支配する国が実現するという福音であり、神のご計画の全体が成就するというものです。当然、

それはイスラエルに対して旧約の預言者たちが預言して来たことであり、それは実現されなければならないことなのです。

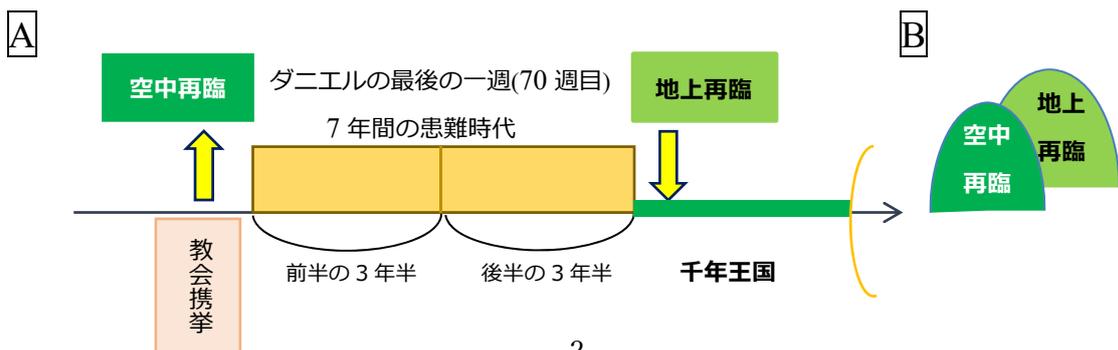
●「御国の福音」とは、「教会」と「イスラエル」の両方を含んだ神のご計画の全体を含むものです。パウロはエペソの長老たちをミレトスに招いて語った訣別説教の中で、**神の恵みの福音**のみならず、同時に、**御国の福音**も語ってきたことを述べています。しかもエペソ人への手紙では「キリストにあって、私たちは御国を受け継ぐ者となりました」(1:11)、「聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証です」(1:14)、「こういう者はだれも、キリストと神との御国を受け継ぐことができません」(5:5)とあります。すなわち、教会も「御国を受け継ぐ」ことと深く関係しているのです。

1. 神のご計画にある二段階計画

●さて、キリストの再臨は二度あるというお話をいたします。以下の、預言者的遠近法の図をご覧ください。旧約の預言者たちが、**メシア(=キリスト)の来臨**をどのように語っていたかを示す図です。神のご計画ではAのようにメシアの来臨として「初臨」と「再臨」があるにもかかわらず、旧約の預言者たちの目には、Bのように、時間軸のない二次元の一つの絵のように見えていたのです。



●聖書ではしばしば同じ出来事が二段階になっていることがあります。キリストの来臨だけでなく、聖霊降臨の出来事も二度あります。最初は教会誕生のとき、二度目はキリストの再臨前にイスラエルの民に対するものです(ゼカリヤ 12:10)。これによってイスラエルの民は神に立ち返ります。そして、「キリストの再臨」の場合も二段階あります。それは、「**空中再臨**」と「**地上再臨**」です。前者は教会に対するものであり、後者はイスラエルに対するものです。しかしこれもBのように時間軸のない二次元の絵のように語られているのです。



●イエシュアの宣べ伝えた「御国の福音」は「世の終わり」の全体的な事柄を知らずしては理解できません。今回はその多くの事柄の中から、その一つである再臨の中の一つの事柄。つまり、「キリストの空中再臨」と「教会の携挙」に焦点を絞り、その必然性について学んでみたいと思います。

●「けいきよ」という言葉を国語辞典で調べるならば、「軽挙」という言葉しか出てきません。その意味は「軽々しいこと、軽々しいふるまいをすること」とあります。その意味の「けいきよ」ではありません。聖書の「けいきよ」は「携挙」と表記します。この用語は神学用語(教理用語)です。しかも、「携挙」という言葉自体も聖書にはありませんが、教会が天に一拳に引き上げられ(携え挙げられ)ることで、空中で主と会うということを意味する用語です。使徒パウロは、テサロニケの教会の人々に対して、このことについて「知らないでいてもらいたくありません。」(Iテサロニケ4:13)と記しています。なぜなら、キリストを信じる者にとって、「携挙」はぜひとも知っておかなければならない重要、かつ基本的な教えだからです。この信仰は新しい教えではなく、初代教会の信仰であったということを聖書から学びたいと思います。かなり多くの聖書の箇所を引用しますが、聖書の引用箇所はすべて【新改訳2017】からです。

2. 「キリストの空中再臨」と「教会の携挙」の教え

(1) Iテサロニケの手紙 4章13～18節

- 13 眠っている人たちについては、兄弟たち、あなたがたに知らずにいてほしくありません。あなたがたが、望みのない他の人々のように悲しまないためです。
- 14 イエスが死んで復活された、と私たちが信じているなら、神はまた同じように、イエスにあって眠った人たちを、イエスとともに連れて来られるはずです。
- 15 私たちは主のことばによって、あなたがたに伝えます。生きている私たちは、主の来臨まで残っているなら、眠った人たちより先になることは決してありません。
- 16 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、
- 17 それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることになります。
- 18 ですから、これらのことばをもって互いに励まし合いなさい。

●「号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます」とあります。すでに2000年前に、主は幼子として処女マリヤを通して誕生するというかたちでこの世に遣わされました。しかし再び来られる時には、天から直接下りて来られるのです。しかしそれは地上にではなく、空中までです。まず、キリストを信じて死んだ者たちがよみがえります。そのあとで、この地上に生きている者たちが、引き上げられるようにして彼らと一緒にになり、共に「**空中で主と会う**」と書かれています。

●テサロニケ人への手紙は、13節に記されているように、イエシュアを信じて眠った人たち(死んだ人たちが)これからどうなるのか、分からないでいる者たちに書かれた手紙です。パウロはこう語っています。13節「眠っている人たちについては、兄弟たち、あなたがたに知らずにいてほしくありません。あなたがたが、望みのない他の人々のように悲しまないためです。」そして、「キリストの空中再臨と教会の携挙」について語ったあとに、ふたたび、18節で「ですから、これらのことばをもって互いに励まし合いなさい」と勧めています。私たちにとっても、ここに書かれていることを知ることはとても重要です。

●さて、携挙の特徴について目を留めてみましょう。

17節に「雲に包まれて**引き上げられ**」とあります。新共同訳も同様の訳です。しかし、新改訳改定第三版では「雲の中に**一挙に引き上げられ**」と訳されています。なぜなら、ギリシア語原文には「**一挙に**」を示す「ハマ」(ἄμα)があるからです。「一挙に」とは「まばたきするような一瞬のこと」です。しかも「**引き上げられ**」と訳されたギリシア語は「ハリパゾー」(ἁρπάζω)の受動態です。意味としては、①ひったくる(奪い取る)、②さらって行く、③つかまえて連れて行く(無理やりに連れて行く)です。そのようにして、雲の中に、つまり、空中に**一挙に引き上げられる**ことを意味します。サタンもビックリです。そのようにして「空中で主と会う」のです。携挙はだれもそれを妨害することができないほどの「瞬間の出来事」なのです。ですから、地上にいる者はそのことに気づきません。



●空中再臨と携挙は、使徒パウロに初めて啓示された「奥義」です。すでに旧約聖書の中にその型があり、エノクとエリヤが死ぬことなく天に挙げられています。イエシュアもそのことに関して、多くではありませんが、語っています。以下の箇所がそれです。

(2) ヨハネの福音書14章1~3節

- 1 「あなたがたは心を騒がせてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。
- 2 わたしの父の家には住む所がたくさんあります。そうでなかったら、あなたがたのために場所を用意しに行く、と言ったでしょうか。
- 3 わたしが行って、あなたがたに場所を用意したら、また来て、あなたがたをわたしのもとの迎えます。
わたしがいるところに、あなたがたもいるようにするためです。

●3節に「場所を用意したら、**また来て**、あなたがたをわたしのもとの**迎えます**。」とあります。「あなたがた」とは、イエシュアの弟子たちのことです。今日的な表現を使うなら、メシアニック・ジューです。そして私たち異邦人は、メシアニック・ジューの弟子たちから伝えられたキリストの福音を聞いて、イエシュアを救い主と信じている者です。つまり、ここでの「あなたがた」とは、キリストをかしらとする教会のことです。したがって、携挙されるのは教会(キリストの花嫁)のことで、旧約時代の聖徒と、携挙の後に来る大患難時代に救われる聖徒たちは、携挙から除外されています。つまり、ここでは**花婿なるキリスト**が

花嫁である教会を迎えに来ることを預言しているのです。

(3) I コリント人への手紙 15 章 51～52 節

51 聞きなさい。私はあなたがたに**奥義**を告げましょう。私たちはみな眠るわけではありませんが、みな変えられます。

52 終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちに**変えられます**。ラッパが鳴ると、死者は**朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです**。

●このテキストで重要なことは、主とお会いするときには、すでに主にあって死んだ者も「朽ちないものによみがえり」、またそのとき生きている者も、同じく「**朽ちないものに変えられる**」ということです。なぜなら、血肉のからだは神の国を相続できないからです。つまり、私たちの生まれながらのからだでは天に入ることはできないからです。必ず、その前に「朽ちないものを必ず着ることになる」のです。

●イエシュアが死から復活されたとき、そのからだはどのようなものだったでしょうか。姿かたちは死ぬ前と同じようであったとしても、少し違っていました。復活されたその夜、イエシュアは弟子たちのいるところに来られましたが、ドアをノックせずに、閉まった戸をすり抜けて入って来られました(ヨハネ 20:19～20)。また、エマオという村に帰る弟子たちと聖書についての話をすることもできました。目に見えない霊ではなかったのです。目に見える新しいよみがえりの身体をもっていました。骨も肉も持ちながら、朽ちることのないからだなのです。不思議がっている弟子たちの前で、イエシュアは「ここに何か食べ物がありますか」と言われました。弟子たちが焼いた魚を一切れ差し上げると、イエシュアは、彼らの前でそれを取って召し上がった、と聖書は記しています(ルカ 24:42～43)。私たちがイエシュアがよみがえられたからだと同様のからだを与えられるのですが、それが実現するのは、空中に携挙される直前(あるいは同時)です。

●患難後携挙説では、「終わりのラッパ」とあるので、黙示録にある七つのラッパの最後という考えですが、七つの封印、七つのラッパ、七つの鉢と次第にさばきが激しくなっていきます。これらのさばきの時にはイスラエルの民は存在していても、7 章から 18 章までは教会の記述は出てきません。なぜなら、患難時代のさばきは、獣と呼ばれる反キリストをメシアと信じて平和の契約を結んだイスラエルに対するものだからです(ダニエル書 9:27 参照)。

3. 神の怒りによる大患難から救われるための「携挙」

●キリストを信じる教会に属する者は、患難時代における目に見える神の怒りから救われています。すでにキリストを信じた時点で霊的には神の怒りから救われているのですが、七年間の患難時代の目に見える出来事としての神の怒りからも救われるのです。ここでもいくつかの聖書的根拠を挙げたいと思います。

(1) ローマ人への手紙 5 章 9 節

ですから、今、キリストの血によって義と認められた私たちが、この方によって神の怒りから救われるのは、なおいっそう確かなことです。

(2) I テサロニケ人への手紙 1 章 10 節

御子が天から来られるのを待ち望むようになったかを、知らせているのです。この御子こそ、神が死者の
中からよみがえらせた方、やがて来る御怒りから私たちを救い出してくださるイエスです。

(3) I テサロニケ人への手紙 5 章 9 節

神は、私たちが御怒りを受けるようにはなく、主イエス・キリストによる救いを得るように定めてくだ
さったからです。

● I テサロニケ 1 章 10 節にもあるように、初代教会は大患難という神の怒りが来る前に「天から来られ
るイエシュア」を、今日か、今日か、と待ち望んでいたのです。「雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主
と会う」(改定第三版、I テサロニケ 4:17)携拳を待っていたのです。初代教会の再臨待望はまさに「携拳
待望」であったのです。それゆえ、初代教会の人々は、「主はもうすぐ来られます」「主よ。来てください。」
を意味する「マラナ・タ」ということばで挨拶を交わしていたのです。

4. 翻訳的見地(原語)からの「携拳」の根拠

(1) II テサロニケ人への手紙 2 章 1~4 節 — 「背教」ではなく、「離れること」—

- 1 さて兄弟たち。私たちの主イエス・キリストの来臨と、私たちが主のみもとに集められることに関して、
あなたがたをお願いします。
- 2 霊によってであれ、ことばによってであれ、私たちから出たかのような手紙によってであれ、主の日が
すでに来たかのように言われるのを聞いても、すぐに落ち着きを失ったり、心を騒がせたりしないでく
ださい。
- 3 どんな手段によっても、だれにもだまされてはいけません。まず背教が起こり、不法の者、すなわち
滅びの子が現れなければ、主の日は来ないのです。
- 4 不法の者は、すべて神と呼ばれるもの、礼拝されるものに対抗して自分を高く上げ、ついには自分こそ
神であると宣言して、神の宮に座ることになります。

● テサロニケ人への手紙第二が、なぜ書かれたのかと言えば、「主イエス・キリストの来臨」〔すなわち、

キリストの地上再臨」と、「私たち〔すなわち、聖徒〕が主のみもとに集められること」〔すなわち、キリストの空中再臨と携挙〕に関して、テサロニケ教会の中に混乱が生じていたからです。換言すると、テサロニケ教会の中に、聖徒を天に引き上げるためのキリストの空中再臨と、大患難期の後に反キリストを滅ぼすために再臨されるキリストの地上再臨とを混同する者たちが現われたことで、それを明確にするためにパウロはこの手紙を書いたのです。

●テサロニケ教会に対して、「主の日」(地上再臨)がすでに来たということを聞いても、落ち着きを失ったり、心を騒がせたり、だまされたりしないようにしてくださいとパウロは言っています。つまり、パウロは「主の日」が来るには、ある順序があるということをここで教えようとしているのです。その順序とは、

- ①「まず背教が起こる」
- ②「不法の者(反キリスト、滅びの子)」が現れる
- ③そして「主の日」、つまりキリストの地上再臨が来る

●しかしここで厄介な問題は、「**まず背教が起こり**」と訳されていることです。この「背教」と訳された原語は「ヘー(ἡ)・アポスタシア(ἀποστασία)」です。「アポスタシア」には二通りの訳があります。ひとつは「背教」とか「反乱」と訳し、もうひとつは「出発」「離別」と訳します。この名詞「アポスタシア」の動詞である「**アフイステーミ**」(ἀφίστημι)の基本的な意味は「**離れて立つ、離れる**」です。これは教会がこの世から離される「携挙」を意味していると考えられます。

5 私がまだあなたがたのところにいるとき、これらのことをよく話していたのを覚えていませんか。

6 不法の者がその定められた時に現れるようにと、今はその者を**引き止めているもの**があることを、あなたがたは知っています。

7 不法の秘密はすでに働いています。ただし、秘密であるのは、**今引き止めている者**が取り除かれる時までのことです。

8 その時になると、不法の者が現れますが、主イエスは彼を御口の息をもって殺し、来臨の輝きをもって滅ぼされます。

●6~8節に「不法の者がその定められた時に現れるようにと、**今はその者を引き止めているもの**があることを、あなたがたは知っています。不法の秘密はすでに働いています。ただし、秘密であるのは、今引き止めている者が取り除かれる時までのことです。その時になると、不法の者が現れます」とあります。不法の者はいつの時代でも働いていますが、その者を引き止めているものがあるのです。「引き止めているもの」の「**もの**」は**男性名詞**で、7節の「引き止めている者」の「**者**」は**中性名詞**です。これは二つの存在ではなく、いずれも「**聖霊**」のことだと考えられます。ただし、**聖霊と教会は切り離すことのできない関係**ですから、「その者を引き止めている」聖霊とは、「**教会**」(女性名詞)だとも言えるのです。教会が携挙されることと、この世から御霊が取り除かれることとは一つの出来事です。したがって、そのときが来ることによって、不法の者である反キリストはその存在を顕著に現すことができるのです。とはいえ、「主イエスは彼(不

法の者)を御口の息をもって殺し、来臨(地上再臨)の輝きをもって滅ぼされるのです。このように、聖徒を天に引き上げるために来るキリストの「空中再臨」と、不法の人を滅ぼすために来る「地上再臨」とを混同してはならず、明瞭に区別されるべきです。

(2) ヨハネの黙示録 3章 10節

あなたは忍耐についてのわたしのことばを守ったので、地上に住む者たちを試みるために全世界に来ようとしている**試練の時には、わたしもあなたを守る。**

●この箇所での翻訳上の問題は、「地上に住む者たちを試みるために全世界に来ようとしている試練の時には」の「時には」という訳です。「全世界に来ようとしている試練(「ペイバスマス」πειρασμός)」とは、反キリストによる未曾有の大患難のことです。しかし原文では「**エク・テース・ホーラス**」(ἐκ τῆς ὥρας)とあり、その意味は「**～の時には**」ではなく、「**～の時から**」という意味です。「～の時には」と訳されると、教会もその試練の中にいることとなります。しかし「～の中から」と訳すなら、教会はその試験の中にはいないこととなります。ここに翻訳者の神学が表されていると考えられます。「**患難前携拳説**」ではその試練(大患難)の中から救われることとなります。教会がなぜその大患難の中を通らなければならないのか、その必然性がまったく乏しいのです。

●確かに、主にある者も「世にあつては苦難があります」(ヨハネ 16:33)とイエシュアは言われました。しかし、ここで問題となっているのはそのような一般的な苦難(「スリプシス」θλίψις)とは異なり、これまでになく未曾有の神のさばきとしての大患難のことであり、その目的も神の選びの民であるイスラエルに対する最後のあわれみの時としての精練的な試練なのです。そうした精練の試練に神の子どもたちが遭う必要性はないからです。むしろ、主の携拳があることを信じて、緊迫感を持って、いつも目を覚ましていることが求められているのです。

5. 携拳の教えは私たちの生き方を清くする

●携拳の教えは、私たちの生き方を変え、キリストとのかかわりを決定的に新しくします。

ヨハネの手紙第一 3章 2～3節を見てみましょう。

2 愛する者たち、私たちは今すでに神の子どもです。やがてどのようになるのか、まだ明らかにされていません。しかし、私たちは、キリストが現れたときに、キリストに似た者になることは知っています。キリストをありのままに見るからです。

3 キリストにこの望みを置いている者はみな、キリストが清い方であるように、自分を清くします。

●2節の「キリストが現れたときに」とは、キリストの空中再臨と携拳のことだと解釈できます。そのと

き、私たちは朽ちない霊のからだに変えられるために、「私たちはキリストに似た者になる」のです。「この望み」を置いている者はみな、「キリストが清い方であるように、自分を清くします」と記されています。つまり、花婿を迎える者はおのずと「自分を清く」するのです。

●「清くする」と訳された原語は「ハグニゾー」(ἀγνίζω)で、新約では8回使われています。その形容詞の「ハグノス」(ἀγνος)も同じく8回です。動詞にしても、形容詞にしても、この言葉は**花婿と花嫁、あるいは夫と妻とのうろわしい関係を表わしています**。「清くする」とは、夫となる花婿キリストに対するかわりにおいて、「純潔」「貞潔」「従順」な関係を意味するのです。そこには二心はあってはなりません。それは妻が夫に対してなす純真な生き方でなければなりません。

●「キリストが清い方である」とは、自分の妻に対する「純真」を意味します。それと同様に、花嫁となる教会(私たち)も、花婿となるキリストに対して「清く」なければならないのです。このことは聖霊によってのみ可能です。いつ花婿が来られても良いように、私たちはこの教え(真理、望み)を知り、それに従って生きている必要があります。それによって当然のごとく、自分の心が変わられ、また生き方が変えられることとなります。

●私たちはすでにキリストを信じることによって花嫁となる約束をしているのです。結婚式はまだですが、キリストの妻となる婚約をしています。その夫となるべき方は必ず来られます。そして迎えに来られる時が結婚式です。その時まで私たちはドキドキ、ワクワク、生き活きしながら、清純な心をもって、花婿を待っていないければなりません。もし私たちのうちに「二心」があるならば、それを捨て去らなければなりません。このように、「携拳」の教えは必ずや私たちの生き方を変え、確実にキリストとのかわりを新しくし、ライフスタイルを一新させます。携拳の約束ときよい生き方には密接な関係があるからなのです。

ベアハリート



●**教会の携拳は、患難時代が始まる前に起こります**。信じがたいことですが、このことをしっかり信じて生きることが大切です。携拳の後に来る、患難時代の苦しみを知る時、携拳は私たちに大きな慰めと励ましを与えます。今は**「恵みの時、救いの日」**なので、「私たちは見えるものではなく、見えないものに目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に続くからです。」(Ⅱコリント4:18)「天からの住まいを上に着」(Ⅱコリント5:4)ることを私たちの唯一の望みとして、キリストによって新しくされた「内なる人」は、日々新たにされて歩みたいものです。**御霊も花嫁も言う。「来てください。」(黙22:17)**